

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和元年 9 月 25 日	
所属部局・職	公益財団法人日本モンキーセンター・事務部
氏名	安倍 由里香

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
タンザニア・ゴンベ国立公園、セルー動物保護区
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物を観察し、飼育下との比較をする、タンザニアの文化・生活にふれる
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
令和元年 9 月 6 日 ~ 令和元年 9 月 15 日 (10 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回モンキーセンターでは初めて事務部からタンザニア研修の機会をいただいた。 これまで生息地研修として、幸島や屋久島を訪れ、そこにくらす野生のサルの行動や環境を見てきたが、今回は海外でニホンザル以外の野生のサルを見ることができるといことで、わくわくと不安が入り混じっていた。不安と言うのは私自身が海外に行ったことがほぼないといことと、三半規管が以上に弱いため乗り物酔いで皆様に迷惑をかけるのではないかという点だった。なるべく不安が解消されるように、ありったけの酔い止めの薬とタンザニアの本を読みあさり、成田空港に向かった。 主な研修先は、ゴンベ国立公園と、セルー動物自然保護区の2か所だ。成田空港出発し、仁川空港とアジスアベバ空港を経由しボマ、そこから船に乗り、ゴンベ国立公園に到着した。16時間の飛行機から国内線への乗り換え2時間、漁船のような船に揺られ2時間、すべてが初めてで酔う暇もなくあつという間の時間だった。9月のタンザニアは乾季にあたり、日中は暑い夜はわりと冷える。宿泊施設は野生動物がそこら中にいるため、窓ガラスはなく、夜風とともに虫が入り放題だ。部屋にはネズミの死骸がお出迎えしてくれ、まるで私たちが動物園の動物側のような。薄暗い部屋の中夜ご飯を食べ、水シャワーを浴びた。着いて早々ともないところに来てしまったと実感した。夜は次の日のトレッキングに備え、チンパンジーに関する簡単な勉強会がなされた。前回研修をしていたグループの報告を聞くと、7時間もトレッキングしてやっとの思いで遠くにいるチンパンジーを見つけた、ということを知っており、野生の生物をみることの難しさを容易に想像できた。夜ご飯を食べている際に参加者の一人が様々な本や報告書を読んで解析したゴンベ国立公園に生息するチンパンジーの家系図を作っており、それを見て「〇〇に会えたらいいね」や、「家系図にのっていない子も見つけられたらいいね」など話し、参加者全員がチンパンジーへの思いを募らせた。 トレッキング当日、現地ガイドの情報からチンパンジーが私たちのいるところから20分歩いたところにいることが分かった。参加者も私もラッキーだねと言いながら、スタートした。道中は坂道もあったが気温も丁度良く、汗もかかずに歩くことができた。歩きを進めるといたるところにブッシュピッグの糞が落ちていた。図鑑でみていたので、こんなに大きなイノシシが急に出てきたらどうしようと勝手に想像して歩いた。また、時折ガイドの方が、植生について説明してくれ、チンパンジーが良く食べる木の実や、チンパンジーのベットも教えてくれた。歩いて20分、ガイドがある木の上を指さした。ついに野生のチンパンジーに会えると思ったが、あまりに高い木の上だったので、最初の感想は「どこ？」だった。目を凝らしても分からなかった。カメラの望遠で覗いてみると、枝と枝の間からかすかに黒い影が動いているのがみえた。どうやらメスのグレムリンとその子供3歳のグレンド、生後2週間の赤ちゃんの3頭だ。生まれて2週間は亡くなる可能性が高い為、名前を付けないと聞いた。およそ30分、木の上でくつろいでいるようだった。私たちもチンパンジーを見られたという満足感でいっぱいになりながら、ずっと木の上を見ていた。観察から約30分、母親のグレムリンが木からおり、急な斜面を登り始めた。私を含め体力に自信がない人が多かったが、「諦める」という選択肢もなく、我先にと一心不乱で急な斜面を登った。結局チンパンジーは軽々と斜面を登り切り遠くに行ってしまった為、もと来た道に戻ることになるが、登った時よりも3倍は時間がかかった。あの底力はチンパンジーなくては発揮できなかっただろう。次の日もグルーミング、採食行動、子供同士で遊んでいる姿を観察でき、かけがえのない体験となった。 セルー動物自然保護区ではゲームドライブとボートサファリをした。キリン、シマウマ、インパラ、バッファロー等テレビでしか見たことのない動物が目の前を横切っていく。機敏に動く草食動物とは対照的に、

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

ライオンは木陰で気持ちよさそうに寝ていた。王者の余裕というものか、日中は無理に狩りをしないとは知っていたが全く動かない。つい、動物園にいるライオンのようだと思った。ポートサファリを終え、ロッジに帰ってくるともう夕日が沈むころだった。一番気持ちが高ぶったことは、ロッジの庭で、悠々と木々を飛んでいくアンゴラコロブスとの出会いだ。木から木へ飛ぶたびに背中白い毛がふわふわと揺れ、夕日とのコントラストが抜群にきれいだった。この景色を見続けられるならこの生活も悪くないな、と思えた自分に少し驚いた。今回の研修では同定できただけでも、鳥類、爬虫類含め 57 種類の動物に出会うことができた。タンザニアのワイルドな生活にも慣れてきたところで、後ろ髪を引かれるように日本に帰国した。

帰国後初めての出勤。いつものように舗装された道路を運転し、24 時間営業のコンビニで、安全なお弁当を買って仕事場に向かう。仕事場は冷暖房が完備され、快適な温度の中パソコンを打つ。町を歩いているときは野生動物や蚊を恐れることなく、財布を隠さずに堂々と持ち歩く。これがいままで「普通」に過ごしていた生活だ。タンザニアから帰って来てどうだろう。私は、私の中の「普通」が変わったことに気づいた。

この「普通」を取っ払うことは、固定概念をなくし、違う角度から見る、はたまた視界を広げることで、新しく、楽しい動物園を運営していくことができる可能性を感じる事ができた。今回の研修では、自分の視野を広げるいい機会になった。

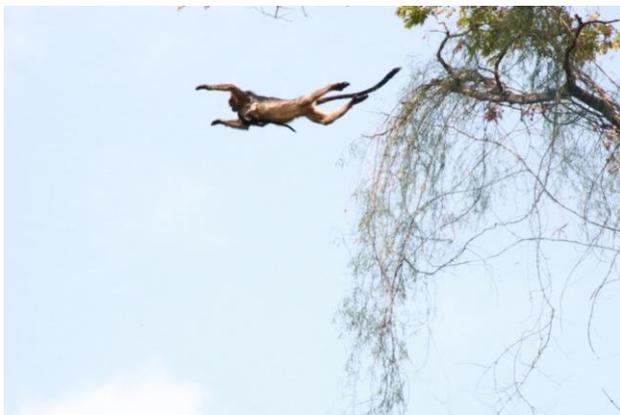
今後は、雑誌モンキーの執筆や、全体会議などで研修の報告をする予定である。



↑ チンパンジーを至近距離で観察する様子



↑ 9 個体のチンパンジーと出会うことができた



↑ アカコロブスのジャンプ



↑ 夕日に照らされるアンゴラコロブス

※メンター (PWS プログラム指導教員) が確認済の報告書を【[report@wildlife-science.org](mailto:report@wildlife-science.org)】宛にご提出ください。

### 6. その他 (特記事項など)